大正・昭和初期におけるホテルの概念の展開

—都市施設としてみた日本のホテルの歴史的研究—

DEVELOPMENT OF THE CONCEPT OF HOTELS DURING TAISHO AND
EARLY SHOWA PERIOD

Historical study of Japanese hotels as urban facilities

勝木 祐仁*, 篠野 志郎**

Yuji KATSUKI and Shiro SASANO

It was during Taisho and early Showa period when hotels, the accommodation facilities which have their origins in Europe, established themselves in Japanese cities as urban facilities. The aim of this study is to define the concept of the hotels of this period through examining how authorities, hotel planners, and the general public perceived the hotels. This examination leads to the conclusion that Japanese hotels of this period were the accommodations that were characterized by the combination of private guest rooms and variety of rooms with specific functions that had been made possible by improvement and expansion of equipment.

Keywords: *Hotel, Modern period, Urban Facilities, Regulation, Popular magazine*

ホテル, 近代, 都市施設, 取締規則, 一般雑誌

1. はじめに

現代においてホテルは日本の各都市に存在し、新たな都市開発においても必ず中心的な施設の一つとして計画されるなど、都市における重要性は普遍化したものと考えられる。特に大きなホテルになると都市に滞在する人々の宿泊を受け持つばかりでなく、ビジネスの場所として、宴会の場所として、娯楽のための場所として、食事の場所として、休息や慰安の場所として、都市における様々な要求に応える施設となっている。しかしこのホテルは欧米に由来する宿泊施設であり、日本においては開国期の外国人の流入を背景として誕生した。それは当初、外国人の利用を対象とした施設であり、立地も各地の居留地及び外国人遊覧地に限られ、日本人一般の生活とは無縁の存在であった¹⁾。

このような出自を持つ日本のホテルが、どのような過程を経て日本の都市および都市生活に適応し、都市機能の一端を担う施設として成立していったかをみることは、都市近代化を施設整備の側面から考察するうえで重要と考えられる。しかし、これまでの日本のホテルについての歴史的研究は、幕末から明治初年のホテルの考証学的研究²⁾、ホテル業の発達を示した産業史的研究³⁾、ホテルの観光施設としての側面を捉えた研究⁴⁾、建築家の作品としてホテルを取り扱った研究⁵⁾などが主なものであり、都市という視点からホテル

を主題として扱ったものは見受けられない。そこで本研究では近代日本の都市におけるホテルの成立と展開を、施設の実体の分析を通して明らかにし、史的評価を行なうことを目的とする。

なお既往の研究にみられる都市部のホテルについての部分的な記述から、近代の日本の都市において多くホテルが建設され、同時に日本人による利用を増やしていったのは、概ね大正期のことと捉えられる⁶⁾。また第二次世界大戦後は戦災および占領軍による接収によりホテルは再び日本人一般の生活から遠のくものの⁷⁾、それまでは、昭和初期において都市部で隆盛をみせたことが示されている⁸⁾。そこで本研究が対象とする期間を、当面は都市施設としての近代日本のホテルの草創期として、大正期から第二次世界大戦までとするのが適当と考えられる。

ところで、ホテルといってもその概念によって示される内容は様でない。現代においても国際会議や結婚披露宴を行う豪華ホテル、宿泊を主眼とした簡素なホテル、繁華街の外れの醜聞になりそうな利用を対象としたホテルなど、語られる文脈によってその内容は大きく異なる。対象とする期間のホテルについても、社会状況や技術的な背景の変化に伴って、その実体が大きく異っていたであろうことは想像に難くない。そこで本稿では近代の日本でホテルという概念がどのように捉えられていったかを示し、今後本研究の主旨

* 東京工業大学大学院人間環境システム専攻 大学院生・工修

Graduate Student, Department of Built Environment, Tokyo Institute of Technology, M. Eng.

** 東京工業大学大学院人間環境システム専攻 助教授・工博

Assoc. Prof., Department of Built Environment, Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

大正

『日本のホテル略史』に開業の記述の見られるホテルの一覧を、営業の継続期間（年表中の塗りつぶし部分）とともに示した。営業の継続期間については、『東京市商工名鑑』も参考とし、なお不明な場合は営業の確認されている時期の後に「→？」を記した。

本稿は以下のように構成される。まず近代日本の都市におけるホ

来日外国人の受け入れのための施設として誕生

一方 都市部において最もホテルの發達がみられた東京につい

また大正期以降は、それまで日本において事例をみなかったよう

昭和7年にはホテル経営の第一人者の一人であった佐藤萬平は

こうして昭和14年の新聞には、東京のホテルが日本人客で賑わっ

このように大正期以降戦前までの東京において、ホテルは日本人

一方、全国に目を移すと、昭和初期には横浜、京都、大阪、名古屋

表2：大正・昭和初期の東京における大型ホテルの計画

計画案の名称等	年代	室数	計画主体
東京ホテルアスター*1	T.3	300	岸 護
ジャパン・ホテル*2	T.8	905	鉄道院、日本郵船、大阪商船ほか
日本ホテル*3	S.3	750	ジャパン・ツーリスト・ビューロー
帝国ホテルによる新ホテル計画*4	S.7	600	帝国ホテル
霞が関アパートメント・ホテル*5	S.10	274	陶霞が関アパートメント・ホテル創立事務所
帝国ホテルの増築計画*6	S.10	280	帝国ホテル

*1『日本ホテル略史』（運輸省，P.113,1946.9）*2『日本ホテル略史』（前掲書，P.126）*3『ツーリスト』16巻5号（ジャパン・ツーリスト・ビューロー，pp.7-11,1928.5）*4『帝国ホテル百年史』（株式会社帝国ホテル，p.395,1991.11）*5『株式会社霞が関アパートメントホテル・設立趣意書』（日本建築学会所蔵，その記述から昭和10年7月ごろのものと推定される。）*6『室数六百の大ホテル』（東京朝日新聞 昭和10年4月24日，3面，1935.4）

図1：八州ホテル
（『八州ホテル案内』より）

図2：第一ホテル
（『建築雑誌』第52集 第640号，P.845,1938.7）

表3：昭和初期の『東京市商工名鑑』および新聞広告に記載された東京のホテル

ホテル名	記載資料	ホテル名	記載資料
新世界ホテル	東京市商工名鑑：昭和4年版	山手ホテル	朝日新聞：昭和12年4/17（17）
東京ホテル	東京市商工名鑑：昭和4年版	霞ヶ関ホテル	朝日新聞：昭和12年11/25（12）
虎の門ホテル	東京市商工名鑑：昭和4年版	駿河台ホテル	東京市商工名鑑：昭和13年版
半蔵門ホテル	東京市商工名鑑：昭和4年版	御園ホテル	商工名鑑：昭和13年版
目黒ホテル	東京市商工名鑑：昭和4年版	中野ホテル	朝日新聞：昭和13年2/5（5）
神田橋ホテル	東京市商工名鑑：昭和4年版	新東京ホテル	東京市商工名鑑：昭和16年版
圓筒ホテル	東京市商工名鑑：昭和4年版	笹屋ホテル	東京市商工名鑑：昭和16年版
葵ホテル	東京市商工名鑑：昭和4年版	『東京市商工名鑑』は、東京市役所の編纂によるもので、入手した昭和4年版、8年版、10年版、13年版、16年版を用いた。記載資料の時期については、各ホテルの初出のものを記した。新聞広告は、東京朝日新聞の朝刊より検索し、記載の見られる年、月、日および掲載面の一例を記した。（）内の数字が記載面。『東京市商工名鑑』と新聞広告の両方に記載がみられる場合は時期の早いほうを優先した。	
菊富士ホテル	東京市商工名鑑：昭和4年版		
洗足ホテル	朝日新聞：昭和4年9/15（12）		
九重ホテル	朝日新聞：昭和5年12/7（11）		
神田ホテル	朝日新聞：昭和5年12/7（11）		
渋谷ホテル	朝日新聞：昭和6年3/18（8）		
昭和ホテル	朝日新聞：昭和6年12/11（12）		
雷門ホテル	朝日新聞：昭和7年12/2（8）		
櫻丘ホテル	朝日新聞：昭和8年6/10（8）		
ジャパン・ホテル	朝日新聞：昭和8年9/23（10）		
うまや橋ホテル	朝日新聞：昭和8年10/24（12）		
丸善ホテル	朝日新聞：昭和9年1/21（9）		
丸半ホテル	朝日新聞：昭和9年1/21（9）		
ホテル・ベニス	朝日新聞：昭和9年7/11（11）		
日比谷ホテル	朝日新聞：昭和9年8/7（8）		
蒲田ホテル	朝日新聞：昭和9年11/17（6）		
言問橋ホテル	朝日新聞：昭和9年9/8（8）		
向島ホテル	朝日新聞：昭和9年11/28（10）		
千代田ホテル	朝日新聞：昭和10年5/3（12）		
芳千閣ホテル	東京市商工名鑑：昭和10年版		
今入ホテル	朝日新聞：昭和11年2/3（12）		
井之頭ホテル	朝日新聞：昭和11年3/1（8）

図3：ホテル松屋
（東京麹町旅館聯盟のリーフレットより：昭和初期）

屋といった日本の大都市において、各自治体の主導によるホテルの建設が行なわれている。これらのホテルは各都市の象徴として、当時の日本の最高水準のものとして建設された²¹⁾。また同時期の『東京市商工名鑑』、新聞広告などから、表1であげたものの他にもホテルという名称を持つものが多く存在していたことがみられる（表3）。しかし東京麹町旅館聯盟のリーフレットに記載された松屋ホテル（図3）は、写真からその概要を窺うかぎり、日本式の旅館の体裁をなしていたものと推察され、このようなホテルが他にも数多く存在していた可能性が窺われる。このように昭和初期においては、各都市の象徴としてのホテルが建設される一方、従来の旅館との差異が不明確なホテルもみられ、様々な形式のホテルが日本の都市において展開し、ホテルという概念も拡張もしくは曖昧化していたとみられる。

3. 『宿屋営業取締規則』のもとでのホテルの制度的位置付けについて

今日におけるホテルの概念については、『旅館業法』²²⁾におけるホテルの定義を参照することができる。そこでここでは本研究の対象とするホテルの概念を検討するうえで、当時の宿泊業全般を取り締まった『宿屋営業取締規則』²³⁾のもとでホテルが制度上どのような施設として取り扱われたかを検討する。なお『宿屋営業取締規則』は各府県ごとに制定され、ここでは前節にならい、東京を中心として検討を行う。東京における『宿屋営業取締規則』は明治20年10月に制定され、この第1章通則中第1条には「宿屋営業ヲ分ケテ左ノ三種トス」と記され、「旅人宿」、「下宿」、「木賃宿」の総体が「宿屋営業」とされている。このうち「旅人宿」とは「一泊定ノ旅籠料ヲ受ケテ人ヲ宿泊セシムルモノ」とされ、ホテルもこれに該当するものとして行政の取り締まりを受けるものとなった²⁴⁾。その後、昭和6年7月の改正により「旅人宿」は「旅館」、「木賃宿」は「簡易旅館」と名称が改められたが内容の規定に変化はなかった²⁵⁾。この『宿屋営業取締規則』は昭和23年7月に『旅館業法』が制定されるまで継続され、すなわちホテルは本研究の対象とする期間を通して、法規上従来の日本式の旅館と区別されず、独立した概念の施設として認められなかった。

しかしホテルで宿泊客以外に料理の提供を行うことは通常のことであったのに対し²⁶⁾、『宿屋営業取締規則』においては宿泊業と料理業の兼業は禁止されており²⁷⁾、当時のホテルの実状と法規の内容は矛盾するものであった。また一般的な通念においてはホテルと認めがたい施設にホテルという名称の濫用がみられ、これは洋式の設備を期待して投宿する外国人客に混乱を与え得るという理由で問題とされたが²⁸⁾、ホテルの定義が法文上でなされていない以上、行政はこれを取り締まる根拠を持たなかった。

このような矛盾と弊害は『宿屋営業取締規則』を改正しホテルを一般の旅館と分けて定義することを求める動きを引き起こした。その中心となったのは明治42年、全国の主要ホテルによって組織された日本ホテル協会であった。この協会は日露戦争以後来日外国人が急増し、国際観光事業の重要性が高まっていったのを背景に、ホテル業者は結束してこれに貢献すべきという国家的な使命感によって設立された²⁹⁾。この日本ホテル協会は当初、農商務相令の同業組合準則による「日本ホテル組合」としての設立を願い出たが、旅館業一般との区別が認められず却下され³⁰⁾、設立に際してもホテルという概念が制度的に認められていなかったことによる困難に直面した。

その後、昭和5年に国際観光局が設立されると、当局はすぐに警視庁を通じて「ホテル及飲食店兼業二関スル件」³¹⁾という通牒を発し、建築の構造、客室数、客室の最小面積、食堂の形式などが一定以上のものを「洋式旅館（ホテル）」として認め³²⁾、料理店の兼業を許可することを指示した。これによってホテルという概念が初めて制度上で認められるものとなった。

しかし時を置かず同年11月26日、日本ホテル協会は国際観光局長に宛てた請願書中、『宿屋営業法規改正希望事項』³³⁾において「旅人宿」を和式の設備を主とする「旅館」と洋式の設備を主とする「ホテル」の2つに分けて定義することを要求している³⁴⁾。この訴えは受け入れられなかったが、日本ホテル協会にとって国際観光局によ

る通牒の内容が十分なものでなく、ホテルは旅館と本質的に異なった概念の施設であり、旅館と独立した形で法規上規定されるべきと主張するものであったと推察される。実際、通牒の中でホテルを規定する項目としてあげられた最低室数や廊下の幅などの量的な規定は、旅館とホテルの概念的相違を反映したものとは捉えがたい。これは国際観光局がホテルの建設に関与するにあたり、ホテルが抱える法的矛盾を回避する必要性が生じ、法律で旅館と定められたものから例外を認めるための基準を設定するという、対処的な処置であったと捉えられる³⁵⁾。

これに対し日本ホテル協会は同請願書中で、ホテル業者が「料理店、演劇場、理髪店、治療設備ヲ有スル浴場、玉突場、舞踏場及ノ他ノ娯楽施設ヲ兼業」³⁶⁾する権利を要求し、国際観光局が料理店の兼業のみを問題にしたのに対し、様々な娯楽施設の存在をホテルの本質的な性質と捉えていたとみられる。またホテル業者が備える義務のある衛生設備を項目として挙げており³⁷⁾、その内容は入浴や用便の形式などについて、主に外国人の利用への対応を意図したものと考えられる。それらは外国人受け入れのための施設整備を組織目標とした日本ホテル協会にとってのホテルの要件を示したものと捉えられる。

4. ホテルの計画・運営に関する言説に示されたホテルの定義

ホテルの計画および運営に関する著述には、ホテルの定義を示したものが見受けられる。ここではホテルの計画指針を具体的かつ系統的に取り扱ううえで、ホテルの定義を明確化することが特に必要であったと考えられる、ホテル建築の設計資料を主な考察対象とする。ホテル建築の設計資料として記された著述の初出は、管見によれば角南隆による「ホテル論」³⁸⁾とみられるが、その冒頭に「日本といふ立場を無視して、單に外國の現在から云ても、『ホテル』の計劃設備萬端に亘つて説を示した人に乏しい」³⁹⁾とあり、これは日本において最も早い時期にホテルの総体を論じたものと見做してよからう。以後、戦前までにホテルの建築設計資料として記された著述の一覧を表4に示す。本節ではこれらの資料を中心に、ホテルの企画および運営に携わった人々によって示されたホテルの定義について考察を行う。

角南は「ホテル論」において、元来日本の都市では料理屋と宿屋が独立して存在してきたのに対し、ホテルではこれらが「如何なる場合と雖も兼業」であり、さらに「人間の極りない慾を充すべきあらゆる装置がそなへられて居る」と述べている⁴⁰⁾。また、このような施設は「一宿屋の觀念や一料理屋といふ様子は想像にも及ばぬ一

大有機物設備」であり、「若し之に日本の之迄の想像による名前を下すならば、宿屋にして、料理屋にして、待合にして、『レストラン』にして『カフェー』にして、公會堂にして、劇場にして、『キャシノ』にして、湯屋にして、商店にして、洗濯會社にして、云々なる建物である」⁴¹⁾として、ホテルをこれらの集合的な施設と定義している。

大正13年の建築雑誌6月号には、当時帝国ホテルの支配人であった犬丸徹三が同年4月に行った「ホテル經營と建築」という講演の内容が掲載されている⁴²⁾。このなかで犬丸は「廣義のホテル」としては「御客様を泊めて、金を戴くと云ふことを以て、營業としたもの」であるが、当時のホテルといえば「最近三十年間に、亜米利加に於て」発達したものであるとしている。それは様々な機械設備の導入により、莫大な資本を必要としたことで大型化、複合化したもので、「デパート、メント、オブ、アミューズメント」または「客の來集を目的とする屋場の取引一切を包含する」ものとして定義されている。

角南と犬丸はほぼ同時期、1920年代のアメリカのホテルの見聞をもとにホテルを論じ⁴³⁾、ホテルを宿泊の機能を越えた娯楽的な要素を含む施設として捉えている。こうした認識は同時期の他の論説でもみられ、当時支配的な捉え方であったとみられる⁴⁴⁾。

続いて大正15年には、アルス建築大講座の一部として「ホテル建築」という設計資料が堀口捨己の執筆、編集によって出版された⁴⁵⁾。そこでは西洋の宿泊施設の系譜が簡潔に記され、「ホテル、旅館は其設備の如何、質の如何によつて上下或は一流二流等に便宜の分けられる。其上等な旅館を外國ではホテル（Hotel）と呼んでゐる。日本では西洋式のものを總てホテルと呼んでゐるようである」と述べている。これは欧米のホテルを当時の流行でなく、起源にさかのぼって考察し、日本の社会一般におけるホテルの捉えられ方を端的示すなど、ホテルの概念を広範な視点から整理して述べたものと言えよう。

これ以後、昭和初期の設計資料においては、ホテルの定義を上述の設計資料から引用して示したもののほか、特にホテルの定義が示されていないものもみられた。これは少なくとも専門的な立場の人々の間では、ホテルの概念が一般的なものとして捉えられるものとなっていたためと考えられる。

これらの設計資料に記されたホテルの定義から総合して判断すると、ホテルを計画または運営する立場にあった人々は、ホテルを従来のどのような施設とも異なる複合的な機能を内包した施設で、新しい可能性を孕んだ建築形式として捉えていたといえよう。

表4：戦前におけるホテルの建築設計資料

著作	著者	出典	参考文献等
ホテル論	角南隆	「建築世界」15-7～16-6、建築世界社、大正10年7月-大正11年6月	アメリカへの視察。約50のホテルに泊まる。
ホテル經營と建築	犬丸徹三	「建築雑誌455号」、日本建築学会、大正13年4月	欧米における長年の実務経験をもとに講演を行った。
ホテル建築	堀口捨己	「アルス建築大講座」、アルス、大正15年12月	欧米文献、欧米雑誌、ホテル經營と建築（犬丸）
ホテルの設計と設備	伊藤滋（訳）	「建築世界」23-5～24-6、建築世界社、昭和4年5月-昭和5年6月	Hotel Planning and Outfitting（The Albert-Pick-Barth Co.）,1928.
ホテル・プランニングについて	古塚正治	「建築と社会」13輯3号、関西建築士会、昭和5年3月	同上
コンマercialホテル計畫の下準備	高橋榮治	「建築と社会」13輯3号、関西建築士会、昭和5年3月	同上
ホテル建築	高橋貞太郎	「建築学会パンフレット／特殊建築のデータ」、日本建築学会、昭和8年5月	同上
ホテル	高橋豊太郎	「高等建築學23／ホテル・病院・サナトリウム」、常磐書房、昭和8年5月	欧米文献、欧米雑誌、ホテル建築（堀口捨己）、ホテル建築講義（塚本靖）、建築雑誌（雑誌）、ホテル經營と建築（犬丸徹三）

5. 一般雑誌の言説から窺われるホテルの概念

ここでは日本の社会一般においてホテルがどのような概念の施設として捉えられていたかを、当時の一般雑誌の言説から考察を行う。

大正中期から昭和初期におけるホテルに関する雑誌記事には、ホテルを様々な都市施設の一つとしてその概要を紹介したものや⁴⁶⁾、ホテルに不慣れな日本人の振る舞いを滑稽に物語ったものなどがみられ⁴⁷⁾、ホテルが話題性の高い存在であったことが窺われる。しかし、これらの記事からホテルがどのような概念の施設として捉えられていたかは判断できない。ただ『改造』の昭和5年2月号に掲載された北村兼子による「ホテル・ホテル」という随筆においては、著者の宿泊したホテルの寸評のほか、ホテル全般に対する見解として、「自分のことを女中に處置してもらふ貴族的旅館屋より自分のことを自分でする平民的なホテルのほうが却って能率が上がる。(中略) ホテルに泊まっても位置がよく設備の行きとどいているところは室料は高くとも却って経済的だ」と述べられている。すなわち、人的なサービスより設備が整っていることをホテルの利点としてあげ、能率と経済性を重視していることがうかがわれる。

一方、日本式の旅館を批判した論説では、その改良の方策としてホテルにある形式がしばしば論じられ、旅館の改良モデルとしてのホテルの捉えられ方を窺い知ることができる。早いものでは明治19年、田口卯吉による「旅館の改良を要す」⁴⁸⁾という論説において、旅館での食事の提供が各客室で行なわれているのに対し、「西洋旅館の制に倣い」食堂を導入することが説かれている。これはホテルという言葉は用いていないものの、ホテルにおける形式の導入を主張したものと捉えられる。その後も日本の宿泊施設を批判した記事は戦前までの期間、散発的に見られるが⁴⁹⁾、大正9年には『婦人友』の8月号で「旅館について思ふこと改良したきこと」⁵⁰⁾という記事が多ページにわたって掲載され、また『日本一』の6月号では「茶代とチップ」⁵¹⁾という特集号が組まれ、当時の旅館に対する徹底的な批判が行なわれている。この時期にこうした議論が活発に行なわれたことは、第2節で指摘した、都市部におけるホテルの施設数および利用者の急増の背景として捉えられよう。

「旅館について思ふこと改良したきこと」は21ページに亘る記事で、各界の学者、小説家、軍の高官、貴族といった上流階級や知識階級の人々総勢105人による旅館に対する批判を一挙掲載したものであった。

この中で最も多く語られているのは茶代の廃止についてで65人が言及している。茶代とは女中などへの心付けのことで、その廃止は室料および料理代を設定すべきという意見とともに多く語られている。これは日本の旅館では室代と食事代の区別がなく、茶代の支払いによって室や食事や待遇の善し悪しに差がつけられたという、曖昧な料金体系への批判であった。これに対し「矢張り部屋は一日何程と西洋風にし、茶代の授受は厳禁し、旅行を容易にする事双方の爲め便利」⁵²⁾といった意見など、ホテルに倣い室の設備内容に基づいた室代の設定を行なうべきという主張がみられた⁵³⁾。この茶代の廃止および室代の設定を求める主張は、客室の空間を占有することの権利とその対価との関係を明確化させるものと捉えられ、ホテルが空間を商品のように扱う簡便で合理的な宿泊施設として捉えられていたとみられる。

ついで客室の構造についての批判が多く語られ、隔壁の不完全な日本の旅館の客室において、隣室や廊下からの騒音、他の客や従業員の不用意な進入が問題とされた。この点について「泊ったら我が一室は即ち我が家で、廊下や隣室の騒ぎも聞こえねば他から犯されない丈の安心が得たいものです。矢張りロックのある洋室がよいと思ひます」といった意見がみられる⁵⁴⁾。すなわちホテルにみられる隔壁および施錠によって、物理的に外部から隔絶された客室の構造が求められている。

また旅館では各客室で食事が行なわれていることに對し、就寝する客と食事や飲酒を行う客がとなり合わせる場合があること、女中による給仕が順番に行なわれるため食事の時間が一定しないことから批判されている。これに対しては「ホテル又はレストランに客は一所に食堂にて食事せしめ」⁵⁵⁾ることが主張されている。またこのことで女中の数を減らすことができ経済的であるとする意見もみられる⁵⁶⁾。また「新聞閲覧と手紙を認める爲めの部屋を設くる事、應接室を設くる事」⁵⁷⁾、「社交室を設け客同志の親睦と知識の交換を助くる事」⁵⁸⁾などといったホテルに一般的にみられる公共室を要望する意見も複数見られる⁵⁹⁾。

こうした公共室への要求はホテルを企画・運営する側がホテルを様々な機能を内包した施設として捉えたのとは異なり、旅館の客室に渾然としていた宿泊、食事、娯楽などの機能を適宜諸室に分割し、各機能が合理的に達せられることを主張したものと言えよう。すなわちその各機能を受け持つ諸室を有したことで、ホテルの室構成および平面計画がモデルとされたものと捉えられる。

「茶代とチップ」は特集記事で、茶代の廃止が主題として論じられているが、旅館の経営全般にみられる不合理に言及し、さらには「旅館改良問題は究極する處建築問題となります」⁶⁰⁾という見解を経て、「簡易ホテル」の建設の提案にまで論を発展させたものであった。ここでも、茶代の廃止と室代の設定、食堂の設置などが主張され、上述の「旅館について思ふこと改良したきこと」で示された問題意識と解決策が共有されている。

以上の主張を総括すると、旅館批判の文脈からは、外部から隔絶されプライバシーの確保された客室を占有することが一定額の支払いによって保証され、その利用に煩わしさのない簡便で合理的な宿泊施設としてホテルが捉えられていたと考えられる。この点は上述の北村兼子の挙げたホテルの利点と同内容のものと言えよう。

また昭和の初期においては圓宿ホテルと呼ばれるものについての記事が新聞および雑誌に多くみられる⁶¹⁾。ある記事によれば圓宿ホテルは昭和4年に亀戸で発祥し⁶²⁾、1円で宿泊できたことから圓宿ホテルとよばれたもので、同時に部屋の時間貸しも行い、部屋の回転率の向上によって利益の追及を図ったものであった⁶³⁾。その実態についての記述によれば、圓宿ホテルは東京において無数に存在し⁶⁴⁾、しばしば待合に代わる施設として「連れ込み」に利用されていた。これもまた旅館改良論者の求めたホテルの特徴と同様、外部から隔絶された個室の存在と利用の簡便さが好まれ⁶⁵⁾、そのことが圓宿ホテルがホテルと称された根拠であり、また多くの利用者を得て都市部に発達した理由と考えられる。

しかし圓宿ホテルがあくまで「圓宿」ホテルと呼ばれ、また「いんちき・ほてる」、「インチキ商売」などとして雑誌において俚上にあげられたように⁶⁶⁾、一般的な通念におけるホテルとは異なるもの

と捉えられていた。それは一つにはいかがわしい利用を対象としたものであったことと、もう一つには客室の空間の利用のみに機能が限定されていたためと考えられる

6. 結論

戦前の日本においてホテルとは曖昧な概念であり、宿泊施設全般をとりしめた『宿屋営業取締規則』においても、旅館との差異が明確に示されていなかった。こうした状況に対し日本ホテル協会はホテルの独自性を主張して法規の改正を求めた。

そのホテルの独自性の具体的内容は、大正中期以降にみられるホテルの企画運営を行う立場にあった人々によって試みられた、ホテルの定義にも示されたものと考えられる。それは単なる宿泊施設ではなく、食事や娯楽など様々な欲求に対応する極めて複合的な機能を内包した施設であった。一方、当時の一般雑誌の言説からは、主に客室を占有する権利の明確化された施設としてホテルが捉えられ、客室の利用の簡便さと合理性にホテルの特徴が見出されていた。このようにホテルの企画運営を行った者たちと、日本人一般とではホテルの概念の捉え方に差異があったとみられるが、日本の都市においてホテルの計画および建設が遑上にあがり、多くの日本人によってホテルが利用され始めていた時期に、各々のホテルへの要求からその概念を形成していったとみられる。

また食事や娯楽のための公共室の存在は、アメリカなど海外のホテルを念頭に語った専門家にとっては当然のものであったが、日本においてはそのあり方を巡って法改正が議論されるなど大きな問題として取り上げられた。この問題のなかで日本ホテル協会はこうした公共室の存在をホテルの本質と捉えていた。また旅館改良の文脈から捉えられたホテルの客室の優位性も、旅館の客室において渾然としていた機能が公共室に適宜分割して配置されることによって達せられるものであった。さらに「圓宿ホテル」と一般的なホテルの差異は、客室以外の利用の有無、施設面で言えば公共室の有無に見出されるものであったと捉えられる。

これらの総合的な評価から、大正から昭和初期におけるホテルとは、個室として確立した客室と、様々な機能に対する適切な空間配分が、設備的な拡充によって実現された宿泊施設として捉えられるものであったといえる。

註

- 日本の初期のホテルの成立と概況についての参考文献として『幕末・明治のホテルと旅券』（大鹿武、築地書館、1987.10）、『日本のホテル小史』（村岡實、中央公論社、1981.6）などが挙げられる。
- 「幕末・明治のホテルと旅券」（前掲書）、澤 護：横浜居留地のフランス系ホテル（1863-1899）、敬愛大学研究論文集 第50号、敬愛大学経済学会編集委員会、1988.6、川崎晴朗・外国人居留地比較研究グループ：近代日本にあったホテル—外国人人名録よりその起源をさぐる—、HOTEL REVIEW、日本ホテル協会、1991.9-12、澤 護：横浜居留地のホテル史（1）（1859-1899）、敬愛大学研究論文集 第50号、敬愛大学経済学会編集委員会、1997.6
- 『日本のホテル小史』（前掲書）、重松敦雄：ホテル物語 明治・大正・昭和のホテル、(株)アド・エース出版、1987.10、木村吾郎：日本のホテル産業史、近代文藝社、1994.3
- 安島博幸・大島正敬：昭和初期の国際観光政策により建設されたホテルの成立背景とその建築、日本建築学会大会学術講演梗概集、日本建築学会、1991.9、砂本文彦：1930年代に政府系資金により建設された「国際観光ホテル」について、日本建築学会大会学術講演梗概集、日本建築学会、1997.9、

- 砂本文彦：1930年代の国際観光政策により建設された『国際観光ホテルについて』、日本建築学会計画系論文集、日本建築学会、1998.8
- 長谷川亮：日本ホテル館物語、プレジデント社、1994.9、谷川正巳：Imperial Hotel 建設年代考：Frank Lloyd Wright 研究・164、日本建築学会大会学術講演会、日本建築学会、1994. など
 - 日本の都市におけるホテルの成立を主題としたものではないが、『日本ホテル館物語』（前掲書、p.281）及び『江戸東京学事典』の「ホテル」の項（村岡實、p.254、三省堂、1987.12）に、当時の東京のホテルの隆盛が触れられている。
 - 前掲書『日本のホテル小史』、pp.190-198
 - 前掲書『日本ホテル館物語』、p.281、前掲「ホテル」『江戸東京学事典』、p.254
 - 生野園六：ホテル問題に就て、ツーリスト 6巻5号、ジャパン・ツーリスト・ビューロー、p.3、1918.9
 - 建設に際して最大の出資者は宮内省であり、敷地は外務省用地を50年間無償借用することで獲得した。（前掲書『日本のホテル産業史』、pp.275-331）
 - 「国際観光ホテル」の成立までの過程は「日本のホテル産業史」第9章（前掲書、pp.275-331）に詳しい。
 - 帝国ホテルは国家の迎賓館として創設されたものであったが（「世外井上公伝」『帝国ホテル百年』、p.40）、日本の最高水準のホテルとして今日まで業界を先導してきた。また「国際観光ホテル」は外国人観光客の国内での外貨消費に、経済効果を期待した観光政策の一貫として企画されたが、昭和5年初頭に65軒であった日本全国のホテル軒数は、昭和15年末には115軒と、約2倍の増加し（運輸省：日本ホテル略史、1946.9【復刻再版】社団法人日本ホテル協会、p.243、1980.10）、その建設が民間のホテル建設への投機を先導した可能性も無視できない。
 - 前掲書『日本ホテル略史』、PP.1-254
 - 昭和13年に「第一ホテル」が約600室を擁した画期的なホテルとして誕生する以前、最大の客室数を有していたのは270室の帝国ホテルであったが、大正12年にF・L・ライドの設計による新館ができるまでは、100室程度でも当時都下最大であった。その他100室以上を有していたホテルは大正13年開業の丸ノ内ホテル（183室）、昭和7年開業の山王ホテル（120室）のみであった。
 - 「丸の内に出来る紐育風のホテル」東京朝日新聞、大正9年（1920）3月1日、5面
 - 「ジャパン・ホテル設立趣意書」（前掲書『日本ホテル略史』、pp.126-129）
 - 佐藤萬平：ホテル事業の経営、中外財界 昭和7年8月15日号、中外商業新報社、p.45、1932.8
 - 第一ホテル：夢を託して 第一ホテル社史、第一ホテル、p.27、1992.3
 - 前掲書「第一ホテル社史 夢を託して」、p.28
 - 「興亜景氣ホテル満腹」東京日日新聞 昭和14年（1939）6月12日、7面
 - 横浜にはホテル・ニューグランド（白土秀次：ホテル・ニューグランド50年史、(株)ホテル・ニューグランド、1977.12）、京都には京都ホテル（株式会社京都ホテル：京都ホテル100年物語、株式会社京都ホテル、1988.9）が、それぞれ昭和2年に建設された。なお京都ホテルは明治23年に開業したものの新規改築であった。また大阪では昭和10年に新大阪ホテルが、名古屋では昭和11年に名古屋観光ホテルが何れも「国際観光ホテル」として建設された（前掲書『日本のホテル産業史』、pp.277-295、3311-312）これらはいずれも当時各都市に十分な規模と設備のホテルがないという問題意識のもと企画され、各自治体や地元の商工会などの支援を受けて建設された。
 - 昭和23年7月12日、法律第138号『旅館業法』制定
 - 明治20年10月13日、警察令第16号『宿屋営業取締規則』制定
 - 『旅館営業重要法規ノ研究』（犬丸 徹三、前言、1921.1）には「本論起稿ノ主旨ハ所謂本陣主義旅館屋ト近代ホテルトヲ同視一列ニ置ク現行法規ナルモノハ時運ニ適應スル點遠キニ非ザルカ（後略）」とあり、ホテルが『宿屋営業取締規則』の取り締まりのもとにあったことが示されている。
 - 昭和6年7月23日、警視廳令第36号『宿屋営業取締規則』改正。なお本稿では「旅人宿」または「旅館」に該当する内容のものは、以後「旅館」として表現を統一する。
 - 「今日のホテルで料理店、飲食店営業を兼ねないホテルは存在しない、事実日本のホテルが料理店を兼業する事は政府も明らかに此を認め、課税上にあつても宿屋と料理店の二つの方面から徴税しているではないか。」（大塚常吉：宿屋営業取締規則改正に關する私見、ツーリスト 14巻2号、ジャパン・ツーリスト・ビューロー、p.8、1926.3）
 - 警視庁令第2号『宿屋営業取締規則』改正（明治20年10月13日）第1章 第4条「宿屋業者ハ同家屋内ニ於テ芝居茶屋席待合茶屋料理店飲

- 食店遊船宿及雇人口入營業ヲ兼ヌルコトヲ得ス但郡部ニ在テハ雇人口入營業ヲ除クノ外此限りニアラス」
- 28) 奈良県では明治末年にはこの弊害が顕在化しており、県警より「濫リニ「ホテル」等ノ稱號ヲ附セシメザル様相當注意セラルベシ」（奈良県 警第9003號ノ明治42年10月）という指示が出されている。また昭和初期においても「純粹の日本式旅館で何々ホテルの名稱を採るものに多きを加へる」（杉田六一：ホテルの語義そのほか、ツーリスト 13巻6号、ジャパン ツーリスト ビューロー、p.24,1925.12）、「ホテルと稱する以上一定の資格あるものに限定せざる限り、國際旅客をして、宿泊後失望せしむるの恐れある」（前掲「宿屋營業取締規則改正に關する私見」、p.7）などの記述がみられる。
- 29) 「ホテル同業組合」発起人、横浜グランド・ホテル社長ホールは、明治42年6月16日、ホテル業者會議を開催し、その設立主旨について演説を行った。（前掲書『日本ホテル略史』,p.94）
- 30) 前掲書『日本ホテル略史』,p.92,p.96
- 31) 前掲書『日本ホテル略史』,p.177
- 32) 「洋式旅館（ホテル）」として認められる条件を以下のように定めた。「一 耐火構造ノ建築ナルコト（体壁・杭床・屋根階段等主要構造部ヲ耐火構造トセルモノ） 二 客室は洋式設備ニシテ一室の有効面積十三平方メートル以上ナルコト 三 客室三十以上ナルコト 四 客室ノ廊下幅員ハ一・五米以上ナルコト 五 食堂ハ椅子卓子式ニ依リ、主トシテ宿泊客ノ食事ヲ目的トシ、副業的ニ外来客ノ需要ニ応ジテムトスルモノニシテ、其ノ食堂客室面積ハ客室（ホテル宿泊室）合計ノ六分ノ一以下タルコト 六 食堂ニ於テハ女給ヲシテ客席ニ待ラセシメザルコト」（前掲書『日本ホテル略史』,p.178）
- 33) 前掲書『日本ホテル略史』,pp.181-184
- 34) 前掲書『日本ホテル略史』,p.183
- 35) 「1930年代の國際觀光政策により建設された『國際觀光ホテルについて』（前掲、p.236）においても、「ホテル及飲食店兼業ニ関スル件」で示された「ホテル」の規準が、ホテルと旅館の差異化の規準を与えた点、および「國際觀光ホテル」の建築設計の規準として参考とされた可能性を評価しているが、これがホテルの概念を表すものとは必ずしも捉えられていない。
- 36) 前掲書『日本ホテル略史』,p.183
- 37) 「イ、バスノ用水ヲ使用毎二取替フルコト ロ、客室毎ニ冷・温ランニング・ウォーター設備スルコト但シ、リゾート・ホテルニ於テハ此ノ限リニ在ラズ ハ、流水ノ便所ヲ設クルコト ニ、セントラル・ヒーティング設備スルコト。但シ避暑ヲ目的トスル營業人ニ對シテハ此ノ限リニ在ラズ ホ、客室數ニ応ジパブリック・ルーム、食堂ノ設備ヲ爲スコト ヘ、塵芥除却ニ関シテハ適當ノ設備ヲ爲スコト ト、時々使用人ノ健康診断ヲ行ナフコト チ、各客室ニハ鎖錠シ得ル出入口ヲ設ケルコト」（前掲書『日本ホテル略史』,p.181）
- 38) これは雑誌『建築世界』（洪洋社）に大正10年7月から大正11年6月まで、全6回連載されたものである。
- 39) 角南隆：ホテル論、建築世界 15巻7号、建築世界社,p.31,1921.7
- 40) 角南隆：ホテル論（其二）、建築世界 15巻8号、建築世界社,p.18,1921.8
- 41) 前掲「ホテル論（其二）」,p.19
- 42) 犬丸徹三：ホテル經營と建築、建築雑誌 455号、日本建築学会,pp.364-373,1925.6
- 43) 犬丸は満鉄のホテルを初め、欧米の著名なホテルを渡り歩き修業し、大正8年、当時アメリカの一流ホテル、ウォードルフ＝アストリア・ホテルに勤務していたところ、ライトの設計による新館を建設するにあたり帝国ホテルの副支配人として招聘され、その後大正12年から支配人として活躍した人物である。また角南の「ホテル論」は大正8年に行ったアメリカへのホテル視察をもとに書かれた。
- 44) 「由來、歐米に於てはホテル事業は有利着實なる事業の一つとして認められ、單に旅客の宿泊饗宴に便するのみならず社交機關として大都市に缺く可からざるものとなつてゐる。」（前掲「ホテル問題に就て」、PP.2-3）「ホテルが旅行に必要なものとして發達して來ましたが、都會に人口が集中されてきますとホテルの存在は單に旅行者の家と云ふばかりでなく、社會生活の上にその利用される境域が一層廣くなつて來ました。」（木暮 寅：ホテル夜話、ツーリスト 16巻9号,p.1928.10）
- 45) 堀口捨己：ホテル建築 アルス建築大講座、アルス,1926.12.
- 46) 「ホテル 都会生活百面相」、經濟往来 5巻11号、日本評論社,pp.10-16,1930.10、雪村：ホテルの横顔 窺ひ見たその内幕、事業の日本 9巻1号、実業之日本社,pp.82-85,1930.1
- 47) まゆみ：ホテル内の喜劇悲劇、婦人画報 282号、婦人画報社,P.141-143,1929.1、左近：ホテル・ボオイの目に映じた社會層、婦人之友 26巻12号、婦人之友社,p.165-169,1932.12
- 48) 鼎軒田口卯吉全集刊行会 編：鼎軒田口卯吉全集 8集,p.116-118、大島秀雄（発行）、1929.7.28
- 49) 井上圓了：旅店改良案、日本人 47号、政教社,1890、「宿屋の改良」、新住宅 第2年8月号,p.130-131、洪洋社,1921.8、三谷民子：旅館建築の改良を望む、建築世界 6巻11号、建築世界社,pp.5-6,1922.11）、「旅宿の不潔も衛生思想の缺乏から」、公衆衛生、大日本私立衛生會,p.40）
- 50) 石川千代松ほか：旅館について思ふこと改良したきこと、婦人之友 大正9年8月号、婦人之友社,pp.26-46,1920.8
- 51) 上野一也ほか：茶代とチップ、日本人 大正9年6月号、共益社,pp.66-102,1920.6
- 52) 前掲「旅館について思ふこと改良したきこと」、p.37（鳩山春子）
- 53) 「部屋の選定は番頭や帳場の認定に依るの例と相成居れども、これは西洋の様に（中略）總べて部屋の設備如何により値段を一定すること」（前掲「婦人之友」大正9年8月号,p.27[早川鐵治]）「茶代だの女中への祝儀など煩はしいことです。洋式の方が結構です。」（前掲書,p.29[田子一民]）「ホテル流にし、食事費と部屋の貸賃とを區別すること」（前掲書,p.38[堀江歸一]）「西洋の宿のように室だけ予約して食事はしてもしなくてもよいというような簡素なものがあつたらよいと思ひます」（前掲書,p.44[石井柏亭]）
- 54) 前掲「旅館について思ふこと改良したきこと」、p.28（佐野利器） なお同様な意見として「宿屋丈は皆西洋式の部屋でありたい。」（前掲書,p.43[三角錫子]）、「ホテルの様に、婦人の一人旅でも安心の出来る様な戸締まりのしつかりし他設備をして欲しいと思ひます。」（前掲書,p.46[渡邊たみ子]）等があげられる。
- 55) 前掲「旅館について思ふこと改良したきこと」、p.29（佐藤綱次郎）
- 56) 前掲書,p.33（南薫造）
- 57) 前掲書,p.31（船橋雄）
- 58) 前掲書,p.33（永井柳太郎）
- 59) 前掲書,p.26（田川大吉郎）
- 60) 前掲「茶代とチップ」、pp.66-102
- 61) 「『圓宿ホテル』征伐」、讀賣新聞 昭和6年3月12日,p.11,1931.3.12、武田藤介：いんちき・ほてる、改造 昭和7年12月号、改造社,p.28,1932.12、「圓宿ホテル・神戸」神戸新聞、昭和9年1月12日,1934.1、「妖しの飽和状態醒めて知る悲哀—圓宿ホテル・エロ風呂の巻」國民新聞、昭和9年2月21日,1934.2、住田 功：圓宿ホテルの客調ペーインチキ商賣往来、話9年9月号、文藝春秋社,1934.9、下村千秋：圓宿ホテル、中央公論 昭和11年8月号、中央公論社,p.357,1936.8
- 62) 前掲「圓宿ホテル」、p.357 なお大阪を発祥地とする説もある。（前掲「圓宿ホテルの客調ペーインチキ商賣往来」、p.177）
- 63) 「一泊五圓のお客さまを待つより、一時間でも二時間でも、いや例へ汽車を待つ間の三十分でもいゝ、これを安い料金で提供した方がどんなに得だか分らない。一人五十錢づつと見積もつても、十人寄れば五圓になる理屈だ。質より數でこなす方が、どんなに賢い分らない。（前掲「圓宿ホテルの客調ペーインチキ商賣往来」、PP.176-177）
- 64) 「圓宿ホテルの最も多い所は？と尋ねて見ると、何といつても江東方面が第一だ。中でも向島であらう。浅草、上野、新宿、渋谷、洗足、京濱沿線、その中でも何處が一番であらうか。その他、麹町でも日本橋でも京橋でも麻布でも青山でも中央線沿線でも、おやこゝにこんなホテルがあるぞ、と以外に思ふやうな場所のばつゝと散在してゐる。それが圓宿ホテルの特徴で、總計にしたら何十であらうか、何百であらうか。」（前掲「圓宿ホテル」、p.359）
- 65) 「全てが簡易、氣兼ねなしに振舞ふことが出来、しかも洋室はすべて鍵がかかる仕掛けで部屋の中は全く別個の別天地」（前掲「圓宿ホテル・神戸」）
- 66) 前註61）参照

（1998年9月8日原稿受理、1999年1月27日採用決定）